

(資料紹介) 『向姓家譜』(和宇慶家) について

崎原 恭子

Brief Notes on A Genealogical Record of Sho Clan

Kyoko SAKIHARA

沖縄県立博物館・美術館, 博物館紀要 第15号別刷

2022年3月31日

Reprinted from the

Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.15

March, 2022

〔資料紹介〕

『向姓家譜(和宇慶家)』について

1) 崎原恭子

Brief Notes on A Genealogical Record of Sho Clan

Kyoko SAKIHARA 1)

概要

『向姓家譜』(和宇慶家)は、令和三年度に和宇慶朝秀氏より当館へ寄贈された。『氏集首里那覇』(注1)の五番一五三六に当たる(注2)。また、本資料と同時に、前掲の『氏集首里那覇』の一番一二六に当たる『向姓家譜』(内間家)も寄贈された(注3)。どちらも、那覇市による家譜収集事業において実物が確認され、那覇市の『家譜目録』(注4)に情報が掲載されている。この『家譜目録』では、所蔵者が「和宇慶朝隆」氏となっている。朝秀氏によると、朝隆氏は元高校教師で、長年に渡って和宇慶門中を管理していた人物という。また、和宇慶家の本家は戦前には那覇に住んでいたそうである。和宇慶門中の十一世・朝房(戦後は朝蒲と名乗る)は戦時中、和宇慶家と内間家の両方の家譜を腹に巻いて戦禍を逃れ、親戚筋を頼りながら、戦後に現在のうるま市(旧具志川市)米原に住んだ。その後、和宇慶門中を管理していた朝隆氏に家譜を託したという。朝隆氏は今から十年以上前に亡くなったが、亡くなる前に、家譜の原本は県立博物館に寄贈してほしい、と遺言のように話していたそうである。

なお、朝隆氏は、『向氏 和宇慶門中先祖を訪ねる』(注5)を著している。先祖が守ってきた『向姓家譜』(和宇慶家)を一九九五年に印刷発行し、その上で、家譜の解説と系図の現代版、門中の歩みを執筆編集したことが序文に記されている。著しく発展した物の豊かさの一方、心の豊かさやよりどころとなるべく、先輩たちが戦後すぐから復活さ

せた門中諸行事と養ってきた血族意識を記録し、持続してほしい願いの込められているようである。和宇慶家を知る上で欠かすことのできない図書である。本書も朝秀氏のご厚意で家譜資料と同じく当館に寄贈された。

まずは、『向姓家譜』(和宇慶家)について紹介する。世系図に「首里之印」の朱方印が押された家格護の家譜である。元祖(立口)が第二尚氏王統の八代目・尚豊王の長男であり、一六三一年に二十歳で早逝した尚恭(浦添王子朝良)の娘・浦添翁主(童名・思乙金)の長男・朝式の次男・朝寓(浦添翁主の孫)である。本家筋の家譜(注6)には、朝式の次男・朝寓(唐名は大典)から始まる家譜が別々に有ると記されている。そのため朝寓は三世の位置づけとなり(注7)、その後、九世まで系図に記録された。

朝寓は尚貞王代の一六七五年に生まれ、尚敬王代の一七四一年に亡くなっている。尚貞王代の一六九三年、尚貞王の孫である佐敷王子(後の尚益王)に従って上国し、米御倉筆者・当職を経て、尚益王代には那覇や慶良間島の唐船勤番を勤めた。尚敬王代の一七一四年に国頭間切の在番、一七一九年の冊封使来琉の際には王城を清掃する役目、一七二四年に石奉行、一七三三年に首里横目、同年伊江島翌年には伊平屋島で帰唐船迎横目を担った。一七三五年には国頭間切の辺野喜湊勤番となった。これは、違法に切り出されてきた樫木(チャージ)の湊からの積み出し(密売)を取り締まるため、辺野喜等の七カ所の湊に配属された役職である(注8)。その後、一七四〇年に御番頭となったが、翌年逝去した。

三世・朝寓の長男である四世・朝芳は、里之子に叙せられていないにもかかわらず、規則に則って、一七三〇年に黄冠(里之子親雲上)に叙せられている。朝芳の母も室(妻)も無系の出身である。これからすると、朝芳は母の元で無系の身分として育った後に認知されたことが推測できる(注9)。翌

1) 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

年三十六歳で亡くなった。次男の朝興は、一七二五年に父親と同じ米蔵筆者、一七二八年には系図座加勢（臨時職）を勤めた。その後、納殿筆者、国頭間切安波湊勤番を勤めたが、四十二歳で亡くなった。三男の朝許は元服後に五年ほどで亡くなった。

四世・朝芳の長男である五世・朝雅は一七五三年に元服した尚穆王の大慶によつて若里之子に叙され、一七七三年には黄冠に叙されたが、何かの役職に就いた記録はない。

五世・朝雅の長男の六世・朝亮に「和宇慶里之子親雲上」とある。

この人物から和宇慶を称することになったと思われるが、その理由は明記されていない。今回寄贈された『向氏和宇慶門中先祖を訪ねる』では、和宇慶門中ではこの頃に田舎下りをしていたという話が掲載されている。朝亮は一七七八年に中城御殿庫理大屋子となり黄冠に叙せられたが、二年後に亡くなった。四男の六世・朝英は一八三六年に内間御殿御番となり、当座敷に叙せられた。和宇慶門中では、朝英が現在のうるま市（元具志川市）兼箇段に定住して生活が安定し、子孫が続いたとのことである。その後の人物達に何かの役職に就いた記録が無いまま、尚泰王代の一八七四年の記事を最後に書き継がれていない。本家譜の題箋・表紙・裏表紙は後補である。ただし表紙の茶紙に貼られた和紙は毛羽立っており、家譜の一部だったかもしれない。また、本紙は和綴で、こよりには部分的に墨が見えるため反故紙が使われているかもしれない。この和綴じの上から白糸で四ツ目綴じされている。また、寄贈者の朝秀氏によると、系図中にある屋号名のエンピツ書き等は朝隆氏によるだろうとのことだった。シミや墨汚れもあるが、比較的状态は良好である。法量は縦二九・七cm、横二〇・五cm、厚さ二・二cm。本紙は八九紙。

あわせて、『向姓家譜』（内間家）についても概略を紹介したい。記載内容は『那覇市史』に掲載されているため、ここでは省略する（注10）。

元祖（立口）は第二尚氏王統の三代目・尚真王の長男である尚維衡浦添王子朝満の四世（ひ孫）・羽地按司朝安の次男である五世・勝連按司朝盈である。朝安は王府の摂政を務めた羽地朝秀の祖父にあたり、朝盈は羽地朝秀の叔父である。この羽地朝秀の弟・朝賢が、叔父

である朝盈の養子となり、浦添翁主（思乙金）と結婚した。その長男である朝式が浦添翁主を元祖（立口）とする浦添按司家（後の高嶺御殿）を継いでいる。勝連家は、六世・朝賢と継室との間に誕生した子どもたちが継いでおり、本家譜でその子孫の経歴が記録されている。

なお、記録は五世・朝盈から始まる一方、本来はあつたはずの系図の前半部分がほとんど欠けており「首里之印」の押印面も無く、九世・朝陳のページ以降は九世・朝崑から十世・長女眞松のページまでとなっている。ただ、記録の記載は八世・朝紀から続く十一世・朝長までであり、最終丁も袋綴じの中央で破れて半丁分しか残っていないことから、記録も後欠となっている可能性がある。五世の朝盈から七世の朝睦までは按司クラスであり、国王の周辺や王府の中枢に近い立場で政治・行政に関わっていた人物の記事が豊富にある（注11）。特に、六世・朝賢の四男である七世・朝睦の記録には多くの特記事項が掲載されている。

その中で当館と関わりの深い二つの事項を紹介したい。一つ目は、当館所蔵の国の重要文化財である『混効験集』に関することである。朝睦は、一七〇八年に内裏言語及び女官糺奉行に任ぜられている。内裏言語（言葉）とは、王府の宮廷語であり、一七二一年に編集された『混効験集』（乾坤二巻）の本来の呼称である。『混効験集』の完成前年には東風平間切世名城の地頭職に転任して松村按司となったため、当館所蔵の『混効験集』には編集に関わった人物として「奉行松村按司」と記されている。女官糺奉行としては、王府の女官の名称や職掌について記した『女官御双紙』の編集に関わった。二つ目は、同じく当館所蔵の国の重要文化財である尚家本の『おもろさうし』に関することである。朝睦は、一七〇九年の首里城火災において焼失した「神歌御双紙」を翌年二二冊に清書し完成させた。その責任者が朝睦であり、中取（部下）に和氏座間味親雲上景典と真氏津覇親雲上実昌、方氏立津親雲上嘉瑞がいたと記されている。この時完成されたものが、当館所蔵の尚家本『おもろさうし』である。第二二の二五丁目の表面には「奉行津嘉山按司朝睦」と記されている（注12）。

いずれも当館に収蔵されている重要文化財・尚家本『おもろさうし』と『混効験集』と関係するため、当館にとって大変貴重な記録の原本が

今回寄贈されたこととなる。

なお、七世の朝睦の跡目は四男の朝法が継いでいる。その後の子孫は、勝連間切神谷、佐敷間切津波古、宜野湾間切高良、浦添間切屋富祖の各地の地頭職となる者、位階を親雲上の座敷まで上げる者、寺社奉行や王族関係者施設の警備等、様々な役職に従事する者もいながら、脇地頭家として継続した。

ただし、『氏集 首里那覇』の項目には「内間」とあり、また、表紙として使用されている反故紙には「内間親雲上」とある。しかし、本家譜には「内間」の地頭職になつた記事はない。記録にある記事は一七八六年が最後であるが、前述のとおり、家譜が後欠となつている可能性が高いと感ぜられる。和宇慶朝隆氏が著した『向氏 和宇慶門中先祖を訪ねる』には、昭和十年頃に和宇慶門中のお墓を首里平良に建立し、本家筋である高嶺御殿から勝連按司朝盈・朝賢・浦添按司朝式等のお骨を移葬したことが記されている。このことから、内間を賜つた後、いつなのか不明だが子孫が途絶えてしまい、家譜の立口らが移葬されるとともに、本家譜が和宇慶家に伝来した可能性があると思われる。

なお、本家譜の表と裏には、「浦添親方」の名で記された覚書きのお品書き(目録)が反故紙として使用されている。反故紙が表紙に代用され、「一番」「向姓家譜小宗」「内間親雲上」と墨書きされている。一方、裏表紙には、破れ部分も多いが、地文が紗綾形の緞子に梅や蝙蝠、花に葉か蕾の浮織物が施された布が付けられている。経糸に茶色の糸、緯糸に茶色や藍色の糸が使われ、浮織に黄色系の糸が用いられている。表紙はほぼ失われているが、糸綴じの一部に同様の布片が挟まれていることから、同じ布が表紙・裏表紙ともに施されていたと考えられる。法量は縦二八・六cm、横二〇・三cm、厚さ一・三cm。本紙は四〇紙。

この度、和宇慶朝秀氏より寄贈された二冊の家譜は、どちらも琉球王国史を示す貴重な資料である。当館に収蔵されたことを機に、『向姓家譜』(和宇慶家)の内容を翻刻し、本稿で紹介したい。

『向姓家譜』(和宇慶家)の翻刻にあたって、人物名以外は当用漢字に改めるようにした。また、後世に書き足されたと考えられる文字に

ついては、ゴシック体を用いた。なお、本資料の翻刻にあたって、当館の田名真之館長には、不明の文字や記事全般のことに関して御指示を得た。記して感謝の意を表したい。

(注1) 那覇市市民文化歴史博物館『氏集 首里那覇』二〇〇八年

(注2) 『氏集 首里那覇』には、「元祖尚恭浦添王子朝良女浦添翁主二代浦添按司朝式支流二子向大典浦添里之子親雲上朝寓 向氏 和宇慶里之子親雲上」と記載されている。

(注3) 『氏集 首里那覇』には、「元祖尚維衡浦添王子朝満四世向維翰羽地按司朝安支流二男向國昭勝連按司朝盈 向氏 内間」と記載されている。

(注4) 那覇市『家譜目録―那覇市市史編集室蔵―』那覇市企画部市史編集室 一九七八年

(注5) 和宇慶朝隆『向氏 和宇慶門中先祖を訪ねる』(有)がじまる印刷 一九九六年

(注6) 注1の『氏集 首里那覇』に記載されている五番―四七九に当たる向姓・高嶺家の家譜。那覇市『那覇市史』資料篇第一巻七家譜資料三(首里系)(一九八二年)に家譜の内容が翻刻されて掲載されている。

(注7) 一世が浦添翁主、二世が長男の朝式という位置づけとなる。

(注8) 『沖縄文化史料集成五球陽読み下し編』(角川書店 一九七四年)に掲載されている尚敬二十三年(一七三五年)「始めて山奉行及び津口勤番を各処に設く」と関連する。

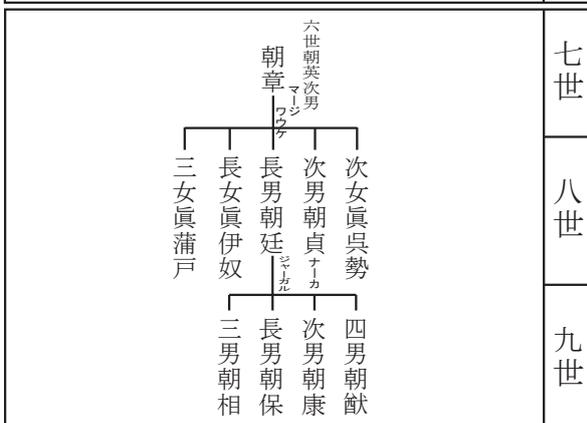
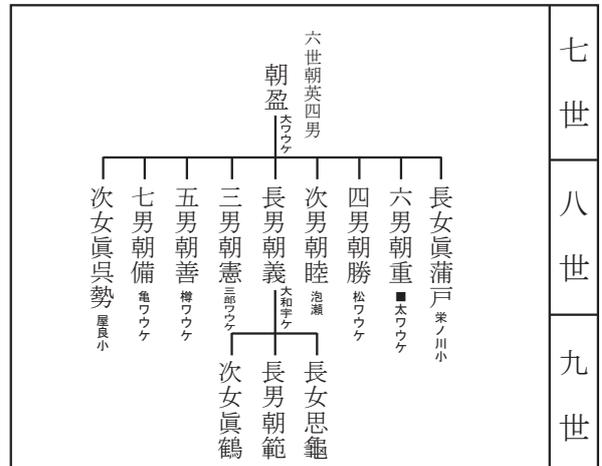
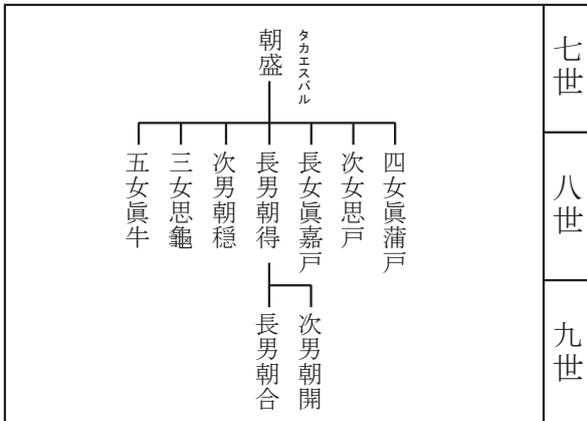
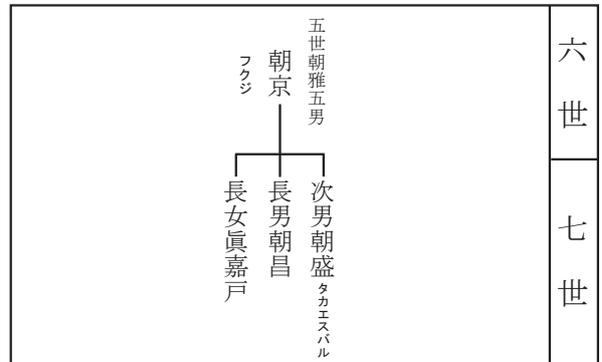
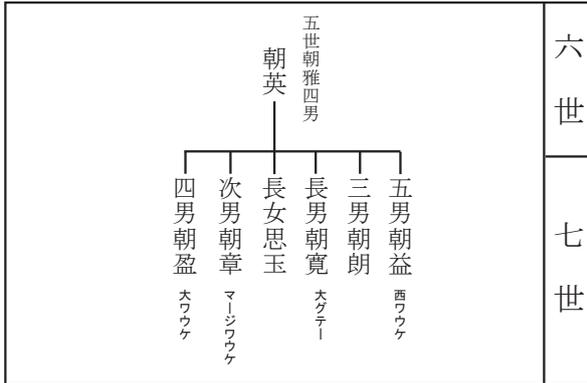
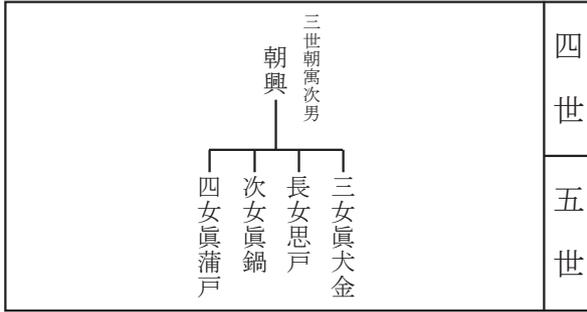
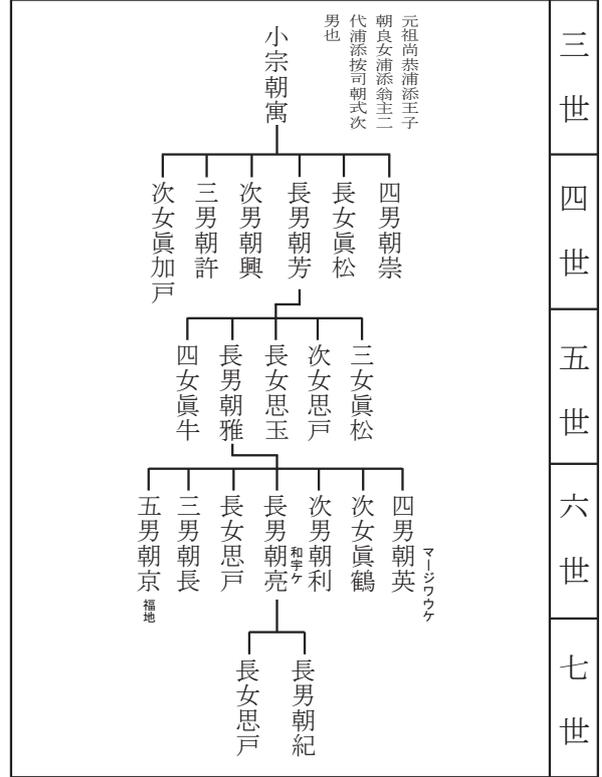
(注9) 田名真之館長の指摘による。

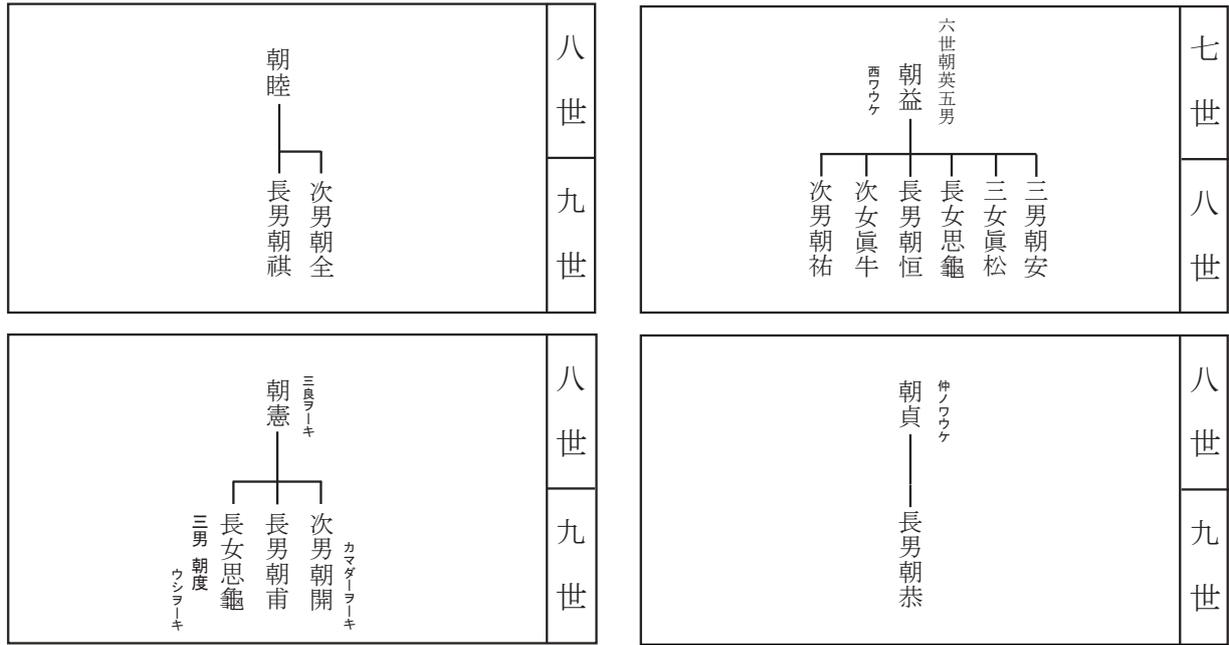
(注10) 那覇市『那覇市史』資料篇第一巻七家譜資料三(首里系)(一九八二年)に掲載されている。

(注11) 六世の朝賢の三男は、後に栢堂と称し、歌人として琉球史上に名を残している。

(注12) 朝睦は、一七二二年に旧記(琉球国旧記)及び女官紘奉行となり、同年、真和志間切国場の地頭職となった。そのため、『沖縄大百科事典』では、「国場朝睦」の名前で立項されている。

向姓世系図





向姓家譜 支流

紀録

三世朝寓 浦添里之子親雲上

童名眞浦戸唐名向大典行二康熙十四年乙卯十月七日生

父尚恭浦添王子朝良女浦添翁主二代浦添按司朝式

母饒氏與那嶺掟親雲上庸昌女思加那

室若狹町村比嘉筑登之女思玉 生死不伝

長男朝芳

継室童氏當銘筑登之親雲上長重女眞鍋 生死不伝

次男朝興

長女眞松 康熙四十六年丁亥七月十二日生

三男朝許

四男朝崇 童名眞牛唐名不伝康熙五十一年壬辰六月二十八日生隨栢堂長老為出家

称祖屋

次女眞加戸 康熙五十五年丙申十月五日生

尚貞王世代

康熙二十九年庚午十二月二十七日叙若里之子

康熙三十年辛未二月十七日結髻髻

本年十月二日為下庫理里之子

康熙三十二年癸酉十二月二十五日蒙 王世孫尚益公從薩州為采旋嘉

儀賜扇子一握今箆紙一束

康熙三十三年甲戌十二月二日為米御倉筆者

康熙三十五年丙子十二月三日叙黃冠

康熙四十六年丁亥四月十五日任当職 勤役三年

康熙四十八年己丑十一月十六日叙座敷

尚益王世代

康熙五十年辛卯十月二十三日於那霸為唐船勤番

康熙五十一年壬辰四月二十六日為唐船勤番航于慶良間島

尚敬王世代

康熙五十三年甲午十二月二十一日為国頭間切在番

康熙五十八年己亥八月因 大使宝舟貴臨本國為掃清王城奉行迄翌年

二月勤為

雍正二年甲辰正月十六日任石奉行職

雍正十一年癸丑正月五日為首里横目

本年十月十九日為伊江島歸唐船迎横目同九月八日歸家

雍正十二年甲寅四月十二日為伊平屋島歸唐船迎横目同九月八日歸家

雍正十三年乙卯四月三日為國頭間切田野喜湊勤番 此役從此時始 其言如左

(原文草書)

覺

國頭間切檜木之儀商売仕候儀前々より御法度被仰付置候処密々切取商売仕候今通二而者先様木絶二可相成候間左之通七ヶ所之津口江勤番一人ッ、相立御扶持方米三石雜石式石都合五石完被成下式年代被仰付致勤番彼津口出入之船則々相改候ハ、密売不罷成檜木致盛生先々御用可相立候間右之通可申付候事

卯

四月三日

乾隆五年庚申六月十五日任御番頭職

乾隆六年辛酉二月五日卒寿六十七号寿仙

四世朝芳

浦添里之子親雲上雖不叙里之子因御模免其位

童名眞牛唐名向允讓行一康熙三十五年丙子二月十四日生

父朝寓

母若狭町村比嘉筑登之女思玉

室那霸住嘉手川掟親雲上女思戸 康熙三十七年戊寅六月十日生乾隆十九

年甲戌十月二十六日死享年五十七号秀室

長女思玉 康熙五十八年己亥九月十三日生

次女思戸 康熙六十年辛丑十月二十三日生乾隆三十三年戊子七月二十三日死享

年四十八号妙岫

長男朝雅

三女眞松 雍正五年丁未五月七日生乾隆三十三年戊子六月十五日死享年四十二

号妙徹

四女眞牛 雍正七年己酉十月五日生

尚敬王世代

康熙五十四年乙未二月三日結敬髻

雍正八年庚戌六月十四日叙黄冠

雍正九年辛亥二月五日不祿享年三十六号春岳

四世朝興

浦添里之子親雲上

童名思德唐名向允執行二康熙三十九年庚辰二月十八日生

父朝寓

母童氏眞鍋

室豊氏小渡親雲上元易女思戸 乾隆二十二年丁丑正月十一日不祿享年五十七

号永林

長女思戸 康熙五十九年庚子十二月二十九日生

次女眞鍋 雍正五年丁未三月二十四日生

三女眞犬金 雍正七年己酉二月八日生同九年辛亥二月十一日殤享年三

四女眞蒲戸 雍正十三年乙卯五月十二日生

尚敬王世代

康熙五十五年丙申八月十一日結敬髻

康熙六十一年壬寅六月十三日叙若里之子

雍正三年乙巳六月五日為米御藏筆者

雍正六年戊申七月二十七日為御系図座加勢同十一月二十七日賜俸米

四石 此時奉行尚氏恩納王子朝直向氏本部按司朝隆翁氏渡久山親方忠平也中取毛氏内間里之

子親雲上安儀向氏津嘉山親雲上朝德向氏山内親雲上朝周同僚毛氏新城里之子親雲上安山夏氏内

嶺親雲上賢光毛氏上地里之子親雲上安平和氏志堅原親雲上景平馬氏宮平里之子親雲上良安向氏

湧川里之子親雲上朝翼向氏高島里之子親雲上朝宜向氏瀬嵩里之子親雲上朝経毛氏嵩原里之子安

生毛氏系滿里之子盛昭略氏與我筑登之春倫也 因其書如左

(原文草書)

覺

御系図座之儀諸士之系祿仕次しらべ方数拾年相滞候付而者当日中取三人迄二而ハ急度取しらべ難成万事支罷成事候依之中取三人之外一

節しらべ方加勢拾式人相立仕次しらべ方相勤させ尤仕切候間式ケ
年御扶持方四石完被成下度旨御系図奉行被申出候此儀同意二奉存
候条御扶持方被申出候通被成下しらべ相濟候ハゞ此中之通中取三
人二可被仰付候此旨奉伺 上意候以上

十一月廿七日

右之通及 言上相濟候間得其意可被成候以上

同日

奥川親雲上

御系図座

雍正七年己酉六月十五日叙黄冠

雍正十一年癸丑八月七日為納殿筆者

乾隆五年庚申十二月十九日為国頭間切安波湊勤番

乾隆六年辛酉三月四日不禄享年四十二号妙雲

四世朝許

浦添子

童名眞三郎唐名向允令行三康熙四十九年庚寅正月十二日生

父朝寓

母童氏眞鍋

尚敬王世代

雍正八年庚戌十二月二十七日結敬髻

雍正十三年乙卯閏四月十八日不禄享年二十六号本然

五世朝雅

浦添里之子親雲上

童名思德唐名向嗣孝行一雍正二年甲辰十二月二十七日生

父朝芳

母那霸住嘉手川掟親雲上女思戸

室向氏具志川里之子親雲上朝衷女思龜 後離別

長男朝亮

次男朝利 童名思龜唐名向汝霖乾隆十六年辛未八月二十二日生同十九年甲戌七

月四日殤享年四

長女思戸 乾隆十八年癸酉十一月二十六日生同十九年甲戌十二月二十二日殤享年二

繼室泉崎村無系大嶺筑登之親雲上女眞加戸 乾隆三十八年癸巳二月五日

死号仙女

次女眞鶴 乾隆二十一年丙子三月五日生同二十二年丁丑十二月六日殤享年二

三男朝長 童名思百歲唐名向孝順乾隆二十六年辛巳十月二日生同三十二年丁亥

十二月十日殤享年七

四男朝英

五男朝京

尚敬王世代

乾隆三年戊午二月五日結敬髻

尚穆王世代

乾隆十八年癸酉八月朔日因 聖上元服之大慶叙若里之子

乾隆三十八年癸巳十二月朔日叙黄冠

乾隆三十九年甲午四月五日不禄享年五十一号清雲

六世朝亮

和字慶里之子親雲上

童名思龜 本名思德 唐名向嗣謹行一乾隆十四年己巳二月六日生

父朝雅

母向氏思龜

室向氏照屋里之子親雲上朝成女思武太

長男朝紀

長女思戸 乾隆四十四年己亥二月二十九日生

尚穆王世代

乾隆二十八年癸未十二月十五日結敬髻

乾隆三十七年壬辰十二月朔日叙若里之子

乾隆四十三年戊戌六月朔日為中城御殿庫理大屋子叙黄冠

乾隆四十五年庚子二月五日不禄享年三十二号善心

六世朝英

童名思山唐名向亨令行四乾隆三十二年丁亥十二月二十二日生

父朝雅

母無系眞加戸

室吳氏屋慶名筑登之親雲上政成女眞加戸

長女思玉 乾隆五十五年庚戌十月二十四日生

繼室金氏城間筑登之親雲上正常女眞伊奴金

長男朝寬

次男朝章

三男朝朗

四男朝盈

五男朝益

尚穆王世代

乾隆四十六年辛丑二月九日結敬髻

尚溫王世代

嘉慶六年辛酉十二月朔日叙若里之子

尚灝王世代

嘉慶二十四年己卯十二月二十五日叙黃冠

尚育王世代

道光十六年丙申十二月朔日為内間御殿御番叙当座敷

道光二十二年壬寅三月二十八日卒寿七十六号寿岳

六世朝京

童名思次良唐名向孝念行五乾隆三十六年辛卯正月朔日生

父朝雅

母無系眞加戸

室菴氏知念筑登之親雲上近善女眞蒲戸 後離別

長男朝昌

繼室薛氏渡慶次筑登之親雲上賀堅女眞嘉戸 道光七年丁亥三月十七日

不祿享年五十五号蘭貞

次男朝盛

長女眞嘉戸 嘉慶十八年癸酉十二月二十五日生

尚穆王世代

乾隆五十年乙巳八月八日結敬髻

尚灝王世代

道光二年壬午十二月朔日叙若里之子

道光十七年丁酉十月六日死寿六十七号安心

七世朝紀

童名眞牛唐名向永昌行一乾隆四十一年丙申七月二十三日生

父朝亮

母向氏思武太

室池氏與那霸筑登之親雲上康昆女眞鶴 道光六年丙戌七月十日不祿享年

三十七号秋月

長男朝久

尚穆王世代

乾隆五十五年庚戌二月三日結敬髻

道光二十二年壬寅十二月二十四日不祿寿六十七号慈雲

七世朝寬

童名眞牛唐名向善述行一嘉慶元年丙辰九月二十九日生

父朝英

母金氏眞伊奴金

尚灝王世代

嘉慶十五年庚午二月九日結敬髻

嘉慶二十四年乙卯十二月二十五日叙若里之子

道光六年丙戌十二月朔日叙黃冠

道光二十一年辛丑三月朔日不祿享年四十六号桃岩

七世朝章

童名眞三良唐名向善達行二嘉慶九年甲子八月十二日生

父朝英

母金氏眞伊奴金

室東氏奧間里之子親雲上政保女眞蒲戸

長男朝廷

長女眞伊奴 道光十五年乙未二月二十日生

次男朝貞

次女眞吳勢 道光十六年丙申八月二十五日生

三女眞蒲戸 道光三十年庚戌三月十七日生

尚灝王世代

嘉慶二十三年戊寅八月十日結敬髻

道光六年丙戌十二月朔日叙若里之子

同治十年辛未九月十九日不祿壽六十八号心岩

七世朝朗

童名眞蒲戸唐名向善秀行三嘉慶十五年庚午十二月二十日生

父朝英

母金氏眞伊奴金

尚灝王世代

道光四年甲申二月三日結敬髻

道光六年丙戌十月二十日不祿享年十七号清山

七世朝盈

童名小樽金唐名向善茂行四嘉慶二十四年己卯八月十六日生

父朝英

母金氏眞伊奴金

室向氏屋良里之子親雲上朝實女思龜

長男朝義

次男朝睦

三男朝憲

四男朝勝

五男朝善

六男朝重

七男朝備

長女眞蒲戸 咸豐六年丙辰五月十日生

次女眞吳勢 咸豐八年戊午十月四日生

尚灝王世代

道光十三年癸巳三月十日結敬髻

尚泰王世代

同治十三年甲戌十二月朔日叙若里之子

七世朝益

童名樽金唐名向善盛行五嘉慶二十五年庚辰八月二十七日生

父朝英

母金氏眞伊奴金

室保氏伊良波筑登之親雲上近丈女眞牛

長男朝恒

長女思龜 道光十六年丙申十二月七日生

次女眞牛 道光十九年己亥七月二十日生

三女眞松 道光二十二年壬寅二月十日生

次男朝祐

三男朝安

尚灝王世代

道光十四年甲午八月十日結敬髻

尚泰王世代

同治十三年甲戌十二月朔日叙若里之子

七世朝昌

童名眞牛唐名向昌規行一嘉慶九年甲子四月十四日生

父朝京

母菴氏眞蒲戸

尚灝王世代

嘉慶二十三年戊寅五月五日結敬髻

道光七年丁亥二月二日不祿享年二十四号春林

七世朝盛

童名樽金唐名向昌模行二嘉慶十八年癸酉十二月二十五日生

父朝京

母薛氏眞嘉戸

室池氏金城筑登之親雲上睦英女思龜

長男朝得

長女眞嘉戸 道光十九年己亥五月十四日生

次男朝穩

次女思戸 道光二十七年丁未五月二十六日生

三女思龜 道光二十九年己酉十月五日生

四女眞蒲戸 咸豐元年辛亥十二月二十八日生

五女眞牛 咸豐四年甲寅七月十八日生

尚灝王世代

道光七年丁亥二月五日結敬髻

八世朝義

童名眞蒲戸唐名向居仁行一道光十六年丙申十月五日生

父朝盈

母向氏思龜

室李氏當銘筑登之親雲上由安女思龜

長女思龜 同治元年壬戌十一月六日生

長男朝範

次女眞鶴 同治七年戊辰十二月十日生

尚泰王世代

道光三十年庚戌八月十日結敬髻

同治十三年甲戌十二月朔日叙若里之子

八世朝睦

童名眞牛唐名向居義行二道光十八年戊戌十一月二十八日生

父朝盈

母向氏思龜

室向氏豊濱里之子親雲上朝雅女眞嘉戸

長男朝祺

次男朝全

尚泰王世代

咸豐二年壬子八月十日結敬髻

同治十三年甲戌十二月朔日叙若里之子

八世朝得

童名樽金唐名向有光行一道光二十一年辛丑九月十一日生

父朝盛

母池氏思龜

室毛氏崎原里之子親雲上盛存女眞鶴

長男朝合

次男朝開

尚泰王世代

咸豐五年乙卯八月十五日結敬髻

同治十三年甲戌十二月朔日叙若里之子

八世朝延

童名眞蒲戸唐名向文鳳行一道光十五年乙未二月二十日生

父朝章

母東氏眞蒲戸

室和氏高原里之子親雲上景英女思鶴

長男朝保

次男朝康

三男朝相

四男朝猷

尚育王世代

道光二十九年己酉八月十日結敬髻

尚泰王世代

同治十三年甲戌十二月朔日叙若里之子

八世朝貞

童名松金唐名向文龍行二道光二十一年辛丑九月十三日生
父朝章

母東氏眞蒲戸

室東氏奥間子政夫女眞吳勢

長男朝恭

尚育王世代

咸豐五年乙卯八月十五日結敬髻

尚泰王世代

同治十三年甲戌十二月朔日叙若里之子

八世朝恒

童名眞蒲戸唐名向宏業行一道光二十四年甲辰十一月十二日生

父朝益

母保氏眞牛

尚泰王世代

咸豐八年戊午八月十日結敬髻

同治十三年甲戌十二月朔日叙若里之子

八世朝憲

童名眞三良唐名向居禮行三道光二十四年甲辰十一月十日生

父朝盈

母向氏思龜

室夏氏兼城里之子親雲上賢睦女松金

長男朝甫

次男朝開

長女思龜 同治十一年壬申三月二十三日生

尚泰王世代

咸豐八年戊午八月十日結敬髻

同治十三年甲戌十二月朔日叙若里之子

九世朝合

童名樽金唐名向廷基行一同治八年己巳正月二十日生

父朝得

母毛氏眞鶴

九世朝開

童名眞三良唐名向有昌行二同治十一年壬申四月二日生

父朝得

母毛氏眞鶴

四男 年(後記)

勝連按司長男 朝式(後記)

尚泰王世代

咸豐七年丁巳八月十日結敬髻

同治十三年甲戌十二月朔日叙若里之子

八世朝久

童名眞牛唐名向得位行一嘉慶二十四年己卯五月十六日生

父朝紀

母池氏眞鶴

室向氏羽地里之子親雲上朝知女眞鶴

長女眞鶴 道光二十五年乙巳六月十三日生

長男朝童

次女思龜 咸豐十年庚申二月七日生

尚育王世代

道光十三年癸巳八月十日結敬髻

尚泰王世代

同治十三年甲戌十二月朔日叙若里之子

九世朝董

童名松金唐名向儒鄉行一咸豐三年癸丑八月十二日生

父朝久

母向氏眞鶴

尚泰王世代

同治七年戊辰十二月十五日結敬髻

九世朝保

童名眞三良唐名向德英行一咸豐七年丁巳十一月十七日生

父朝廷

母和氏思鶴

尚泰王世代

同治十年辛未八月十日結敬髻

九世朝康

童名松金唐名向德雄行二咸豐八年戊午十月二日生

父朝廷

母和氏思鶴

尚泰王世代

同治十一年壬申二月八日結敬髻

九世朝相

童名眞牛唐名向德俊行三咸豐十年庚申十月七日生

父朝廷

母和氏思鶴

尚泰王世代

同治十三年甲戌八月七日結敬髻

九世朝猷

童名眞蒲戸唐名向德傑行四同治四年乙丑正月十八日生

父朝廷

母和氏思鶴

九世朝恭

童名眞三良唐名向正倫行一咸豐九年己未正月五日生

父朝貞

母東氏眞吳勢

尚泰王世代

同治十三年甲戌八月七日結敬髻

九世朝範

童名小樽金唐名向士賢行一同治四年乙丑正月二日生

父朝義

母李氏思龜

九世朝祺

童名眞牛唐名向鴻齡行一同治三年甲子九月二十日生

父朝睦

母向氏眞嘉戸

九世朝全

童名小樽金唐名向鴻鳳行二同治七年戊辰十二月十四日生

父朝睦

母向氏眞嘉戸

九世朝甫

童名小樽金唐名向延勤行一同治三年甲子九月十日生

父朝憲

母夏氏松金

九世朝開

童名眞蒲戸唐名向延棟行二同治七年戊辰十二月二十日生

父朝憲

母夏氏松金

八世朝祐

童名松金唐名向宏勤行二咸豐元年辛亥正月二十五日生
父朝益

母保氏眞牛

尚泰王世代

同治五年丙寅十二月二十五日結敬髻

八世朝安

童名眞蒲戸唐名向宏達行三咸豐八年戊午四月七日生

西の和宇ケ(後記)

父朝益

母保氏眞牛

尚泰王世代

同治十一年壬申二月八日結敬髻

松和宇ケ(後記)

八世朝勝

童名樽金唐名向居智行四道光二十七年丁未十一月十二日生

父朝盈

母向氏思龜

尚泰王世代

咸豐十一年辛酉三月十日結敬髻

同治十三年甲戌十二月朔日叙若里之子

樽和宇ケ(後記)

八世朝善

童名松金唐名向居信行五道光三十年庚戌十一月二十九日生

父朝盈

母向氏思龜

尚泰王世代

同治四年乙丑八月十日結敬髻

次太和宇ケ(後記)

八世朝重

童名小樽金唐名向居爵行六咸豐三年癸丑八月二十一日生

父朝盈

母向氏思龜

尚泰王世代

同治七年戊辰十二月八日結敬髻

龜和宇ケ(後記)

八世朝備

童名思龜唐名向居烈行七咸豐四年甲寅十二月五日生

父朝盈

母向氏思龜

尚泰王世代

同治七年戊辰八月十日結敬髻

八世朝穩

童名眞三良唐名向有輝行二道光二十三年癸卯七月十八日生

父朝盛

母池氏思龜

